

平成22年5月31日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520124

研究課題名（和文）

近代工芸の美術史・産業史・地域史の基礎資料としての内国勸業博覧会出品作品の研究

研究課題名（英文） Reserch of works exhibited in the National Industrial Exhibition, to assume basic material for art history, industrial history, and regional history of modern craft.

研究代表者 伊藤 嘉章 (ITO YOSHIAKI)

独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館 学芸部長

研究者番号：80213099

研究成果の概要（和文）：

明治期の工芸は殖産興業、世界に向けての日本発信という二つの面で日本の近代化に大きな役割を果たした。明治前期の内国勸業博覧会は、工芸の発展を促すとともに、その時点での工芸の状況を示すものであった。先行研究では、出品目録等により作品情報の集積が行われてきたが、本研究では作品自体を伝世資料、写真資料などから収集を行なった。さらに当時の博物館での収集記録などもデータ化し、より多角的な近代工芸像を示すための基礎資料を作った。

研究成果の概要（英文）：

The craft of the Meiji era period played a major role to the modernization of Japan in two respects such as the encouragement of new industrys and Japan sending for the world. The national industrial exhibition at the first term of the Meiji era pressed the development of the craft, and showed the situation of the craft at that time. In the previous work, work information has been accumulated by the catalog of exhibits etc.

Works were collected from the Denseihin material and the photograph material, etc. in the present study.

I made records that Tokyo National Museum at that time had collected data, and made basic material to show a diversified modern craft image.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：工芸史

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：近代工芸、博覧会、内国勸業博覧会、博物館

1. 研究開始当初の背景

近代工芸は日本の近代化の中で大きな役割を果たしてきた。この近代工芸の展開を考える上で、博覧会は大きな意味を持っており、既に先行研究の中で、万国博覧会出品目録、内国勸業博覧会受賞目録などがまとめられてきていた。

その一方で、作品自体に対する研究は必ずしも進んでおらず、出品目録等からの文字情報からだけでは工芸の展開を美術史的な観点から捉えることは困難であった。

2004年から2005年にかけて万国博覧会関連の展覧会が開催され、そうした工芸の実情の一部が明らかになる中で、今後の近代工芸研究の基礎資料として、内国勸業博覧会に関連した工芸作品の集成を行なう必要があった。

2. 研究の目的

近代工芸の展開に重要な役割を果たした博覧会の中で、内国勸業博覧会に焦点を定め、特に明治前期の博覧会での出品作品を集成する。従来の文字情報に加えて、その作品自体を明らかにしていくことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 現存作品の調査。東京国立博物館などで当時収集された作品の調査

(2) 写真帳のデータ化。当時刊行された博覧会出品作品の写真帳の画像データベース化

(3) 刊行雑誌等の資料のデータ化。当時刊行された雑誌、錦絵などに掲載された工芸作品の絵を画像データベース化

4. 研究成果

本研究では明治前期、特に明治10年(1877)第一回内国勸業博覧会、明治14年(1881)第二回内国勸業博覧会について、細かなデータ収集を行なった。また、授賞一覧といった既存のデータについても原典にあたることで、精度を高めた。

様々なデータを統合し、データベース化を行なった。そこでは、作品名、作者等、作者等の所在地、価格、評価に加えて、出品当時と現状について判明したものには画像を付け加えた。

1 文字情報のみであった近代工芸が、当時の画像、現存資料の画像とあわせられることで、作品としての評価をも可能とするものとなった。制度史中心であった近代美術史に具体的な時間軸を持った作品が登場することで、作品に迫った研究への道を開くものとな

る。

2 第一回、第二回内国勸業博覧会における博物館(現東京国立博物館)の収集の実態が明らかになった。特に第二回については詳細なデータを示すことができた。これにより、明治前期において日本がどのような工芸政策を持っていたのかを考えるための重要な資料となる。

3 当時出品の単位であった各府県毎のデータを収集することができた。これによって、各地域で行なわれてきた研究が、全国的な状況と結びつけていくことが可能となる。地方における近代工芸史研究の上でも重要な基礎資料となる。



第一回内国勸業博覧会 美術館 展示作品
上：写真帖 下：現存作品



上：錦絵 下：現存作品

(1) 明治 10 年 (1877) 第一回内国勸業博覧会について

授賞一覧 1620 件

写真帖 137 件

府県より帝室博物館へ献納 145 件

『〔明治十年〕内国勸業博覧会出品雑誌』 32 件 田中寿嗣編

錦絵 (美術館内部の描写) 1 件

博物館 (現東博) 収集 (現存作品) 漆工 5 件 陶磁 12 件 染織 4 件 金工 7 件

第一回内国勸業博覧会は、明治 6 年のウィーン万国博覧会、明治 9 年のフィラデルフィア万国博覧会への参加の後に、万国博覧会の国内版として行なわれた最初の博覧会であった。内務省の博覧会事務局によって写真帖が作られたのは先のウィーン万国博覧会の際に作られたものを踏襲したものであった。この際の写真帖の特筆すべきは、作品についての簡単な解説がつけられていることである。写真帖掲載の作品がどのような根拠で選ばれたのかは明らかではないが、現存する作品が 10 件確認されている。また、当時この博覧会の出品作を紹介するために刊行された『内国勸業博覧会出品雑誌』には、写真帖掲載作品が 9 件 (全 32 件の内) 紹介されており、写真帖の作品に対する当時の評価を推し量ることができる。

博物館の収集については、献納されたものは鉱物資源、工芸原料、農業関連品などで、いわゆる工芸作品はほとんど含まれていない。現在の東博所蔵作品は個別に作者等からの寄贈、購入であるが、購入に関する一括資料が見つかっておらず、詳細は明らかではない。当時の美術館に展示された作品については美術館内部を描いた錦絵が一点あり、この中に描かれた作品の一部を、写真帖、雑誌等から確定することができた。現存作品も 2 点含まれており、これによって、錦絵の描写がどの程度作品を反映したものかが明らかになった。これによって、現存しない作品の参考資料として、色彩があることも含めて重要な意味を持つものであることが明らかになった。

地域では、石川県が既に「金沢博物館」を有していたことから、出品作品の収集を当時行っており、現存作品として実見が可能であることも明らかになった。

(2) 明治 14 年 (1881) 第二回内国勸業博覧会について

授賞一覧 1186 件

写真帖 211 件

博物館 (現在東京国立博物館) 購入 690 件 現存作品 39 件

『第二回内国勸業博覧会 列品図録一』 110 件

第二回の内国勸業博覧会では、新たに建設された博物館の本館を博覧会の美術館として用いた博覧会であった。この博覧会では第一回と同様に、出品目録、授賞一覧とともに、写真帖が作られている。これに加えて、博物館 (現東博) に博覧会の際に行なった購入の記録がまとまった形で残っていることが明らかになり、第一回と比して多くのデータが収集された。

写真帖では 211 件中、8 件。

博物館 (現東京国立博物館) の収集品

① 第二回内国勸業博覧会の購入は「従明治十四年四月至全年十二月博物館購求品目録并代價仕訳書」としてまとめられている。

内国勸業博覧会出品品の購入は「内国博覧会場物品買上ノタメ別途御下附」として「金三千五百八拾五円九拾四銭壹厘貳毛」が支出され、「明治十四年七月第二回内勸業博覧會場ニ於テ買収品」「第二回内國勸業博覧會買上目録」「明治十四年内國勸業博覧會出品買上目録 礦物ノ分、明治十四年内國勸業博覧會出品買上目録 礦物類」の三種類がある。当時の博物館の史伝部、工芸部、天産部、それぞれの部による購入であった。各部の経費の内訳を、「天産部 金九百五拾七円九拾九銭九厘七毛」、「工芸部 金貳千貳百五拾円六拾七銭六厘」、「史伝部 金三百七拾四円〇六銭五厘五毛」と記す。上記の三つのリストの内、史伝部と天産部には価格の表記があり、それによって集計すると天産部では不明を除いて約 80 円にしかならず、史伝部では逆に約 485 円と内訳とは大きく異なる数字となっている。このため、上記リストは当時の博物館が内国勸業博覧会に際して購入したものについての完全な記録ではないことも確かである。

博物館が何を、どこの誰から購入したのか、という基本的なデータを含み、一部ではあるが、東京国立博物館に現存する作品と結びつけることも可能である。陶磁に関するものとしては、史伝部では 66 件の項目中、「瓦杯 群馬県 三枚 七銭」「菊紋附皿 長崎県 五枚 一円五拾銭」(精磁会社製。G-3194) があるのみ。天産部には 117 件の項目中陶磁は無い。工芸部の購入品リストには、509 件の内、陶磁 98 件 (ただし、原料土 13 件を含む)、これに七宝が 9 件が含まれる。

② 購入品の評価から

当時の博物館は殖産興業の拠点であり、産業としての側面を強く意識したものであったことが分かる。

陶磁・七宝関係の 107 件中、17 件が賞牌を受賞しているが、そこには「美術品ノ特ニ精巧ナルモノニ與フ」とされた妙技賞牌は含まれていない。2 件が購入された七宝会社は「全国ニ冠絶シ名誉ヲ海外ニ輝カスニ足ルヘキモノニ與フ」という名誉賞牌を「七宝画製品」

で受賞している。

これらの購入品で陶土などを除いた陶磁 85 件中、現在も東京国立博物館に収蔵されている作品がわずかに 9 件。産業としての工芸の意味合いの強かった購入品は、博物館が日本の古美術を展示するという役割に変わっていく中で、姿を消している。

(3) 研究の意味と今後の展望

明治時代前期、第一回、第二回の内国勸業博覧会に出品された作品について、現存作品、写真・絵画資料を従来の文字情報に組み合わせることで、紀年銘資料となる基礎資料の提示を行った。これらは各地の研究者によって、さらに補強されるものであり、そこからあらたな研究の展開が期待される。

また、こうした資料の掘り起こしの過程で、近代日本の工芸の位置づけとその変化が明らかになりつつある。同時に、博覧会、博物館の果たした役割も新たな光が当てられることともなった。これらは近代美術史にとっても重要な役割を果たしていくものといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

伊藤嘉章 「第二回内国勸業博覧会の出品作
—博物館(現東京国立博物館)収集品から—」
近代国際陶磁研究会 2008 年 6 月 8 日 瀬戸
市文化センター

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤嘉章 (ITO YOSHIAKI)
九州国立博物館 学芸部長
研究者番号：80213099

(2) 研究分担者

三笠景子 (MIKASA KEIKO)
東京国立博物館 学芸研究部保存修復課研
究員

研究者番号：80450641
2007 年度

(3) 連携研究者

三笠景子 (MIKASA KEIKO)
東京国立博物館 学芸研究部保存修復課研
究員

研究者番号：80450641
2008～2009 年度

(4) 研究協力者

小川幹生 (OGAWA MIKIO)
名古屋市博物館学芸員

土井久美子 (DOI KUMIKO)
大阪市立美術館学芸員

高橋美奈子 (TAKAHASHI MINAKO)
山種美術館学芸部長